

No. 517【2022年8月12日配信】

瓊江丸遭難事件とチェスボロー号事件 (担当:工藤大輔)

こんにちは！ 室長の工藤です。

合浦公園に明治27年(1894)7月11日に北海道江差の北海汽船会社などによって建てられた
たまえまる
「瓊江丸遭難記念碑」と刻まれた石碑があるのをご存知でしょうか。場所は公園南側の正門からまっすぐ海手(北)に進み、大きなトイレの前を右(東)に折れて少し行ったところ。碑の海手には石川啄木の歌碑があります。



瓊江丸遭難記念碑

明治24年7月11日午前2時30分、江差の北海汽船会社が所有し北海道の寿都^{すつつ}から青森へ向かっていた瓊江丸と、新潟を出港しその後函館などに寄港して小樽へ向かう予定の三吉丸が、白神崎(北海道最南端の岬)沖で衝突するという事件が起きました。これによって瓊江丸は沈没し、320人の乗員・乗客のうち260人余りが命を落とす(さきの碑文では254人)という、当時としては最大規模の海難事故となりました。

そしてこの瓊江丸には出稼ぎ先の北海道から、ふるさと青森県へと帰る人が多数乗船していたのです。7月13日付の『東奥日報』は、青森県分の人的被害は死亡者30人、原籍不明の死亡者が135人、また生存者は12人と報じています。この頃、青森県から北海道への出稼ぎ者数は、年平均20,000人を超えていたといえます。この数は県内の漁業人口に匹敵するもので、多くの人が北海道へ出稼ぎに行っていたことが分かります。

ところで、連日この遭難事件を報じる新聞社は、一方で義捐金の募集と受付を始めました。たとえば、東奥日報社は7月16日付の紙面で義捐金募集の広告を掲載し、これに続けて、「チェスボロー号義捐者諸氏に告ぐ」という7月15日付の文書を掲載していました。

チェスボロー号とは、明治22年11月に西津軽郡車力村沖合で遭難したアメリカ商船チェスボロー号のことで、この事件に際しても東奥日報社は義捐金を集め、アメリカ領事館を通じて遺家族に渡そうとしています。しかし、亡くなった乗組員は必ずしもアメリカ人ではなかったことなどから義捐金が戻され、東奥日報社が寄附者の了解を得て今後の海難事件の「救助」の義捐金として預かっていました。

この7月15日付の文書は、2年前の事故の義捐金を県を通じて今回の遭難者(具体的には生存者65人)に渡すことを、当時の寄附者に報告するものだったのです。これまで知られていなかった、チェスボロー号事件でアメリカから返金された義捐金の行方・使途について、はからずも瓊江丸事件を調べる過程で明らかになりました。